家庭科教育の男女必修の在り方
－被服教育における中・高等学校の連携を図る－

藤　永　峯　子

はじめに

21世紀に向けた教育改革は、個性を尊重し、社会の変化に主体的に対応できる人間の育成を求めている。

平成６年は国際家族年として、家族の機能の見直しや、家庭生活を、男女が協力して創設していくという、自分の生き方との係わりで考えていこうとすることが大きくクローズアップされた。

家庭科教育は、社会や家庭および生徒をとりまく環境の変化に対応し、人間としての在り方、生き方につながる教育として期待されている。それは、生涯学習の基礎を培うという観点に立ち、将来、子どもが主体的に生きるための資質や能力をどう育てるかという教育の大きな流れを受けるものである。単に生活するための知識や技能の伝達、あるいは習得に主たる目的をおくのではなく、家庭生活をより充実・発展させる能力を育成することにある。

本研究では中・高等学校の連携を図る家庭科教育の、とくに被服教育の円滑実施についてまとめたい。

1　研究の目的

高等学校家庭科は、平成６年度より履修方法の改善が図られ、「家庭一般」「生活技術」「生活一般」の３科目の内１科目（標準４単位）をすべての生徒が選択履修することになった。

中学校技術・家庭科では「家庭生活」「木材加工」「食物」「電気」領域（各35単位時間）が必修、その他は選択領域となっている。中学校の選択領域「被服」を履修しないで高等学校へ進学した場合、知識、技能における個人差がみられ、高等学校における被服教育の実施が困難になっている。

そこで、男子も履修することになった高等学校家庭科の、とくに被服教育の円滑な実施に向けて、次の２つの視点を考えた。

- 生徒が興味・関心を持つ教材の選択
- 教員の家庭科に対する意識変革

この視点を具現化することが、男女必修の被服教育の在り方につながると考え、高等学校家庭科における実施状況の調査を行った。

2　調査の概要

(1) 調査対象

① 県内公立高等学校生徒

１年生（男子272名　女子296名）　568名

（当所における研修講座受講者の担当クラス）

② 県内公立高等学校家庭科担当教員　37名

（当所における研修講座受講者）

(2) 調査期間

平成６年９月～11月

(3) 調査方法

質問紙法

（調査項目は、本文中に設題としてあげている）

(4) 調査内容

① 生徒の実態

② 教員の意識

3　調査の結果と考察

(1) 生徒の実態［生徒用調査］

① 被服の履修状況（図１、図２）

設題「中学校で被服を学習しましたか。」

図１　被服の履修状況（男子）

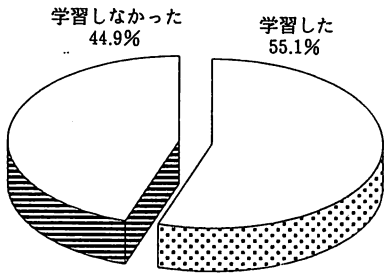
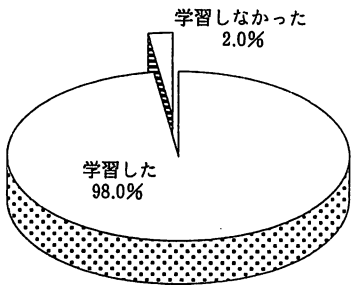


図２　被服の履修状況（女子）



被服の履修状況を見ると、男子は履修している者が55.1%、女子は98.0%である。女子はほとんど被服を選択しているが、男子の多くは選択７領域（金属加工、機械、栽培、情報基礎、住居、保育、被服）の内、被服以外の何れかを選択している。

② 被服の履修内容（表１）

設題「中学校の被服実習でどんなものを作りましたか。」

履修内容としては、男子はショートパンツ、女子はパジャマの製作が多い。

表1　被服実習の履修内容…多いものから3項目

性別	製作物（複数回答）	
男子	ショートパンツ	29.6%
	パーカー	17.1%
	エプロン	13.2%
女子	パジャマ	45.0%
	ショートパンツ	35.5%
	パーカー	25.5%

③　被服学習についての生徒の意識（図3、図4）

設題「被服についてどう思いますか。」

被服実習を「大変楽しい」と感じている者は、男子4.5%、女子6.5%、「楽しい」と感じている者が男子9.4%、女子21.5%である。しかし、「楽しくない」と感じている者が男子10.1%、女子7.7%、「学習したくない」と感じている者が男子で34.1%、女子にも16.5%あった。

図3　生徒の意識（男子）

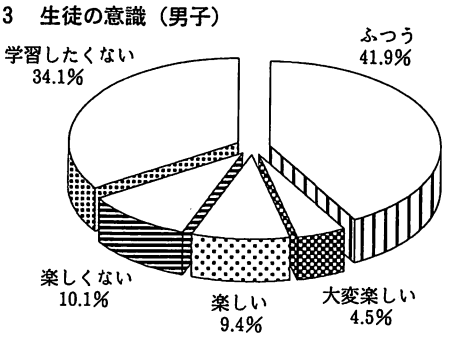
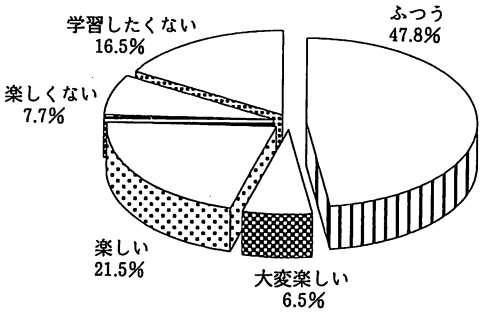


図4　生徒の意識（女子）



被服実習嫌い（学習したくない、楽しくない）が男子44.2%、女子24.2%もあることから、興味・関心の持てる教材の選択や、指導方法の工夫改善をすることが大切である。

(2) 教員の意識［教員用調査］

①　家庭科担当教員から見た授業に対する生徒の意識（表2）

設題「家庭科を、生徒がどのように受け取っていると思いますか。」

表2から、生徒の様子を、教員がどのように感じとっているかがわかる。男子は、気持ちに余裕を持って授業に望み、家庭科に対して生活に役立つ教科、5教科よりも楽しい教科と思いながらも、受験に関係ない教科をなぜ学習するのかという不満を持っている。女子は、将来、生活に役立つ教科と感じており、男女必修になったことで更に意欲的になっているようで、好ましい方向と考えられる。

表2　授業に対する生徒の意識

性別	教員から見た生徒の実態	
男子	1　気楽さや余裕が見られる。	24%
	2　一人で生活するのに役立つと感じている。	22%
	3　5教科（国・社・数・理・英）よりも楽しいと感じている。	21%
	4　大学受験や就職試験に関係ない教科と考えている。	19%
	5　授業を軽く考えている。	14%
女子	1　将来、生活に役立つと思っている。	38%
	2　男女必修になり意欲的になってきた。	19%
	3　他教科よりも大切に思っている。	17%
	4　興味はあるが、細かい作業は苦手である。	16%
	5　授業を軽く考えている。	10%

②　家庭科授業の生活への実践化（表3）

設題「家庭科の授業が生徒の日常生活に生かされていると思いますか。」

被服実習では、生きていくために必要な知識と技能を習得する。そこで、学習したことが、生徒の日常生活に生かされているかどうかを見ると、「生活にあまり生かされていない」が最も多く、次いで、「生活に生かされている」となっている。

表3　家庭科授業の実践化

生活にあまり生かされていない	45.9%
生活に生かされている	32.5%
生かされているかどうかわからない	21.6%

③　家庭科担当教員の家庭科に対する意識（表4）

設題「男子生徒も必修となった家庭科を、あなたはどのように認識していますか。（文章回答）」

表4　家庭科担当者の家庭科に対する認識

- 一人の自立した人間を育てるための教育が、他教科よりも行いやすく、生徒の将来を考える上で欠かせない教科である。
- 生活に必要な知識と技術を習得させる大切な教科である。
- 生活に必要と感じているが、生徒にそれを認識させるには教師側の努力と研究がかなり必要である。
- 生活していく上で男子にも必要なものであり、男女必修になったのは当然だ。
- これからの社会の中では、男女がともによりよい家庭を創造していき、社会に貢献していくための基礎として大切な教科である。

家庭科担当教員の意見をまとめると表4のようになる。その多くは、家庭科に対して、「生きていく上に役立つ大切な教科」、「男女ともによりよい家庭を築いていくための基礎となる大切な教科」、という意識を強くもっている。

このことから、家庭科を担当する者が、男子生徒に

も興味・関心が持てる授業を如何に工夫し創造していくかが大切になってくる。

4　男女必修の被服教育の在り方

被服教育は、中・高等学校相互の情報交換等をとおし、また、個人差を考慮してスムーズな実施が望まれる。

(1) 被服教育の内容

中学校では必修領域「家庭生活」(35単位時間) の中で衣服の着用と手入れ、選択領域「被服」(20単位時間から30単位時間までを標準とする) では日常着・手芸品の製作、生活と被服との関係を履修する。

高等学校では「家庭一般」の中で衣生活の設計と被服製作を、「生活技術」の中では衣食住の生活管理と技術を、「生活一般」の中では衣生活と被服製作を履修する。

(2) 題材の選択

題材の設定には、生徒の興味・関心や能力に応じる配慮が必要である。とくに家庭科では、家庭生活の充実・向上を図るための能力や態度の育成において、題材の選択が大切になる。

① 実習の題材として配慮すべきこと

実習の題材としては、個々の技能や授業時数の制約もあり、短時間で完成できるもの、また、完成した後、実生活ですぐ利用できるものが望ましい。さらに、個々に工夫・発展の可能なものがよい。

② 実習の題材とその活用

表1の履修内容をみると、多くの中学校が男女ともにショートパンツやパーカーを取り入れている。中・高等学校の一貫性から考えて、中学校と高等学校間での同一実習題材は望ましくない。また、高等学校では、広範囲の地域からの生徒を対象とするため、同一の題材ではなく、ある程度高度な視点を含め、高校生という発達段階に合うものに配慮することが大切であろう。そこで、被服製作における実習題材の配慮すべき点として次の4項目を考えた。

A	布の扱い方やミシン操作などの基本的な技術を習得できる題材であること。
B	生徒が学習意欲を喚起する題材であること。
C	男女同一の題材とし、短時間で製作できるものであること。
D	生徒の個性が表現できるような、創意工夫のできるものであること。

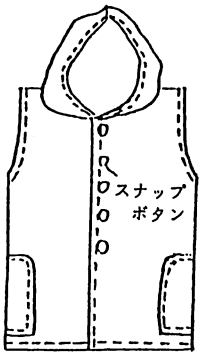
A～Dに配慮した被服実習題材を開発することにより、中・高等学校家庭科における、被服教育の円滑実施につながると考えた。これをもとに、いくつか題材をあげてみる。

(ア) パーカーベスト (15時間程度)

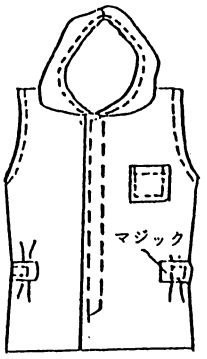
パーカーの袖なしのものである。

★利点

- 簡単な手縫い (しつけする程度) やミシン縫い (直線縫い、曲線縫い)、ポケットつけやスナップつけなどの技術が習得できる。 (A)
- 男女ともに着用する可能性が高い。 (B)
- 袖なしでパーカーよりも短時間で完成する。 (C)
- ポケットの形や前開きの変化により、個性の表現が可能である。 (D)



開きの部分に、スナップボタンをつける。



開きの部分に、オープンファスナーをつける。ウエストにマジックテープつきのタブをつける。

☆留意点

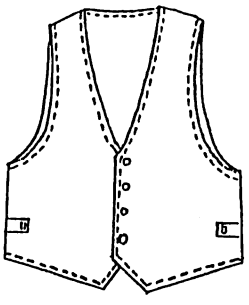
フードつけの部分に授業進度の差がでると思われる。段階標本やビデオ等により、容易に理解できる配慮が大切である。

(イ) リバーシブルベスト (10時間程度)

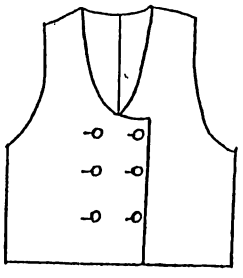
基本形のベストを表裏ともに着用できるようにし、ズボンやスカートに合わせられる。

★利点

- 簡単な手縫い (しつけする程度) やミシン縫い (直線縫い、曲線縫い)、ポケットつけなどの技術が習得できる。 (A)
- 男女ともに着用する可能性が高い。 (B、C)
- ポケットの部分に個性の表現が可能である。 (D)



ポケットをつけてもよい。



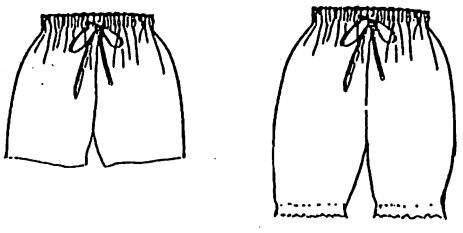
打ち合わせをダブル前にし、えりぐりはUネックにする。

☆留意点

リバーシブルであり、表裏ともに縫い目の美しさが望まれる。とくに丁寧に縫製することが大切である。

（ウ）パンツ（7時間程度）

丈の変化により、ショートパンツやズボンになる。また、裾幅の変化により、ショートパンツやキュロットパンツにもなる。ベストと合わせ着用できる。



★利点

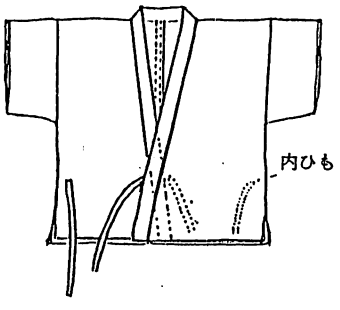
- ミシン縫い（直線縫い）が多く、手縫い部分が少ないので、ポケットつけやアップリケでまつり縫いやボタンつけなどの技術が習得できる。（A）
- 男女ともに着用する可能性が高く一斉作業しやすい。（B）
- 形によっては1時間扱いも可能である。（C）
- 丈の長さやポケットの形の変化により、個性が表現できる。（D）

（エ）作務衣（10時間程度）

元は禅僧の日常着である。上着とズボンの二部式であるが上着の方を製作する。作業着として働きやすく着心地がよい。

★利点

- 簡単な手縫い（しつけする程度）やミシン縫い（直線縫い）、ポケットつけなどの技術が習得できる。（A）
- 男女ともに着用する可能性が高い。（B、C）
- 丈の長さやポケットの形の変化により、個性の表現が可能である。（D）



☆留意点

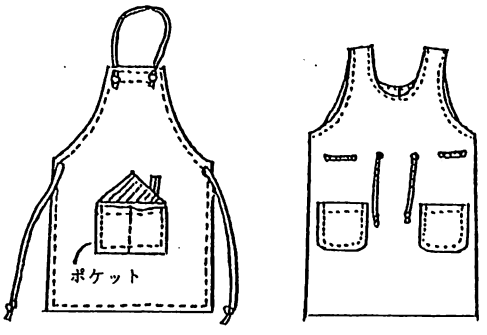
直線縫いが殆どで簡単である。縫いの分量が多く、完成に手間どる生徒には、綿密な指導計画が必要である。

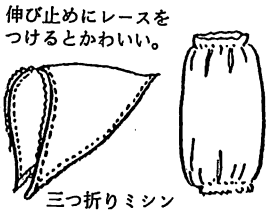
（オ）エプロン（7時間程度）

エプロンは小学校や中学校で製作している。高校生としては、高度な部分を取り入れ、紐の種類を変えたり、共布で、帽子や腕カバー、エプロンをセットとして入れる袋を作ることもできる。

★利点

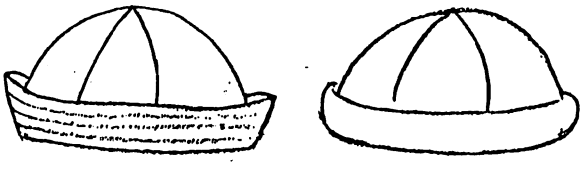
- ミシン縫いが殆どである。共布で三角布や腕カバー、それらをセットにして入れる袋などを作ることにより、手縫いの基礎（まつり縫いやボタンつけ等）が習得できる。（A）
- 完成後は、学校の調理実習や家庭で着用できる。（B）
- 直線縫いが多く短時間で完成できるので、ミシン縫いの苦手な生徒にも取り組みやすい。（C）
- ポケット口のまつり縫いや、アップリケの一つとしてボタンつけを取り入れることで、個性が表現できる。（D）





（カ）帽子（7時間程度）

日常に身につけるものとしてファッション感覚が養える。



★利点

- 製作をとおして、ミシン縫い（直線縫い、曲線縫い）や手縫い（まつり縫い）の技術が習得できる。（A）
- 日常生活での着用機会が多い。（B）

・布の総分量も少なくてすみ、男女ともに短時間で完成できる。（C）
・つばの幅を広くしたり、せまくすることで個性を表現できる。（D）

☆留意点

型くずれしない、しっかりしたものを作るために頭を覆う部分とつばに芯をいれる。表裏の布と芯の3枚を合わせるときに、とくに丁寧さが望まれる。

(3) 被服製作における弾力的な指導

被服製作の学習において、生徒が満足感や充実感を味わうには、授業中における生徒の姿をできるだけ予測し、それに対応するための教具や資料の準備が必要である。また、それらを導入および展開のどの部分で機能させるかを考えておく。

実技指導では、個々に学習する場が多く、あらかじめ学習過程にそって、個別の計画を立てておくことも大切である。

体験的な学習を進めるには、実習題材の完成標本や段階標本、実物資料、ワークシート（生徒の個別学習の援助や方向づけをする）、スライド、ＯＨＰ等を活用するのが最も効果的である。

また、中・高校生の時期は男女ともに、自分の服装についての関心が高い。布の見分け方や、素材の持ち味を生かしたデザイン作りを実習の中に組み入れ、楽しい学習を創造することも必要である。

(4) 「被服」における評価

生徒のよさや可能性をのばすためには、一人一人の個人として優れているところを積極的に捉え、認めたり励ましたりしながら、生徒の可能性を前向きに育てていく工夫が大切である。

関心・意欲・態度の評価は、作品のできばえや到達水準の状況とともに、行動をとおして内面を読み取ることが大切である。

技能については、中学校「被服」領域の履修、未履修により個人差が見られる。反復練習することにより、技術が身についてはじめて技能の習得につながるといえる。

知識・理解については、実践的、体験的な学習を進める中で、技術との関連を重視することが大切である。

現時点として、関心・意欲、実践的な態度、技能等は、男女の差ではなく個人差を考慮して望むことが適切ではないかと考える。

5　まとめと今後の課題

家庭科は、女子のみを対象とする時代は過ぎ、男子にも、生きていくためのよりよい環境づくりを学ぶ教科として大切である。

家庭科男女必修における教員の意識については、家庭科担当教員は、「男女がともによりよい家庭生活を創造していくための基礎として大切な教科」と捉えている。

昨今、中・高校生ともに男子生徒も衣料品店に出向き、自分の被服を購入している時代である。正しい知識と選択眼を持ち、衣に対する関心が高まることは好ましい現象である。日常生活においては、衣生活に必要なものを調達するだけでなく、家庭経営者として、家族の被服のリフォームや縫製技術の力をつけていくことが必要である。また、単なる被服製作に終わるのではなく、製作をとおして、家庭生活の充実・向上を図る能力や態度を育てていくことが求められる。

高等学校の被服教育は、自分の被服を製作することから更に視野を広め、住まいの装飾や小物の製作、洗たく、手入れ、収納管理に至る衣生活全般を自立して行うことへの準備段階である。

今回の調査では、被服実習嫌いの生徒が高校1年生男子に4割、女子にも2割あった。被服実習を楽しいものにするには、題材による興味づけが重要である。本研究で提示した作品が参考になるのではないかと考える。

今後、指導方法の工夫・改善を図り、楽しく夢のある被服教育の創造を願っている。

おわりに

本研究が各学校の家庭科教育推進に少しでも役立てば幸いである。

最後に、今回の調査に対して、ご協力いただいた関係の方々に深く感謝し、お礼申し上げます。

参考文献

・文部省『小学校指導書　家庭編』(1989)
・文部省『中学校指導書　技術・家庭編』(1992)
・文部省『高等学校学習指導要領解説　家庭編』(1989)
・文部省『中学校技術・家庭指導資料　学習指導と評価』(1993)
・文部省『高等学校家庭指導資料　指導計画の作成と学習指導の工夫』教育図書(1992)
・藤枝悳子著『男女が共に学ぶ家庭科』教育図書(1992)
・高部和子・津止登喜江・櫻井純子著『実践家庭科教育大系』開隆堂(1989)